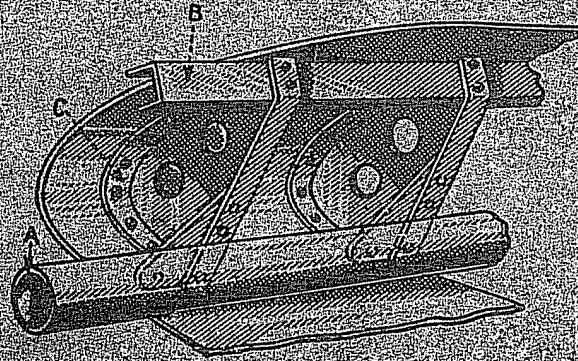


KÔKÛTISIKI

# 航空知識



12

第七卷

第十三號

航空知識社

# 滞 歐 雜 記 帳 (その二十)

工 學 士 山 本 峰 雄<sup>(1)</sup>

## 15. 戦塵を避けて

明くれば8月26日。過去7ヶ月餘を過した懐かしい伯林を去る日である。あはたらしい戦塵逃避行の前夜に夢を破られた空征く爆音も未だ耳朶に消えやらぬ午前7時私は早くも床を蹴つて居た。いつもの如く白い浴槽の湯に浸つて窓に映る朝の日さしを眺めて居ると、昨日迄の私の生活が再び今日も始まるかの如き錯覚すら起るのである。

然し現實は浴みして居る内も急ぎ足で最後の爆發に近づきつゝあるのである。朝食もそこそこに残りの書類を整理してたつた一つ残つた旅行鞆と手提鞆の中に詰めて居ると9時には既に勞働戦線のH女史が訪ねて来る。私は數度の見學に一方ならぬ骨を折つて呉れた彼女に篤く禮を述べた。それから話は日本人の引揚げの事に入つて、彼女は戦争は決して起らないであらうと云ふ事、日本人の引揚げは獨ソ不可侵條約を憤慨して居る爲ではないか等と繰返して事情を訊すのである。私は日本大使館の勧告に依つて引揚げるのである旨を繰返す。日本語の出来る、そして時々日本語の手紙を寄こした彼女は一度は日本を訪れる機会があるだらうと東京での再會を楽しみにして居る。彼女の集めて來れた數冊の書籍とそして見學報告書を受けて私は彼女と別れた。私は齡50を過ぎたH女史と再び日本で會へるかと思ひながら彼女を送出した。彼女はいつもと變らない少し危げな足取りで暗いアパートの階段の下に吸は

れて去つたのである。

10時、私は過去7ヶ月の間に世話になつた人々に挨拶すべく家を出た。伯林の街はいつもと變らない表情を見せて朝の活動は高潮に達して居た。

11時、私は再び下宿に戻つて主婦とそして集つて來た人々に最後の別れを告げた。同宿の人々は或は伊太利に或は獨逸の國內に旅行中で果して靖國丸に間に會ふかどうか疑はしい。私は旅行中の友人にあづかつた荷物を主婦に托して、主婦と共に下宿の前のタクシーを拾つてレーアター驛に向つた。主婦はハンケチを出して眼を抑へて居る。300人の日本人の世話をして來て自ら日本人の母と稱して居る彼女にも、斯くの如き突然の引揚げは未だ經驗のない事であつたのである。

私は彼女を見るに耐えなかつた。腫を思出深い伯林の街路に移すと重武装をした一隊の兵士が緊張した態度で行進して來るのにあふ。平常伯林の街を歩いて居る兵士と云へば銃を持つたものはなかつた。日曜に街に出て來る兵士は全てスマートな上質の服をつけて、大半が愛人とのどかな散歩を楽しんで居るのである。それでなければ軍隊輸送車の中に鐵兜もいかめしくおさまり返つて通過ぎて行くのであつた。徒歩で銃を持つて居る部隊は始めてであつた。

我々のタクシーはスプレー河をモルトケ橋で渡つてやがてレーアター驛の廣場に入つた。驛の右手の街路から一隊の屈強な招集兵が手に手に旅行鞆を一つ宛提げて、二列縦隊で驛の構内に入つて行く。中には40を過ぎた人々が多い。何れも黙

(1) 航空研究所

々としてたくましい眉をあげて人々の無言の見送りを受けて居る。

驛の構内は多數の軍人が右往左往して昨日に變る風景である。切符を求めてプラットフォームに入るとのどかな平常の風景とおよそ懸離れた情景である。軍服姿の將校を見送る家族、招集を受けた若者を勵ます友人でプラットフォームは混雑を極めて居る。荷物を席に収めて再びプラットフォームに出ると其處には伯林工科大学のC君が見送りに來て居る。私は彼から借りた書籍を返し、後の事を頼んであはたらしい一時を語つて居ると、

「アインスタイゲン」の聲が掛る。私はC君と主婦とに固い握手を交はして車中の人となつた。彼等は再び會ふことを信ずるが如く「アウフ・ウィーダーゼーエン」と呼び帽子とハンケチを振つて居る。私は車の昇

降口に立つていつ迄も彼等に答へた。席に歸ると遂に彼等と別れたのだと云ふ惜別の情が湧上つて來る。

食堂車の中は相變らずのどかに樂しげである。ミトロバの獻立は私を満足させて呉れた。本物の珈琲でなくても之が最後と思へば、一入なつかしい思ひがする。車窓から眺める田園の風物は一片の雲もない快晴の碧空の下に地平線の彼方迄のどかに擴がつて居る。森の裾のエリカは相變らず淡紅色のしとねを繰擡げて居るし、ダリヤは家々の前庭に華かに伸びて居る。之が戦塵逃避の旅であらうかと自ら疑はざるを得ないのびやかな風光で

ある。

車中で2組の同朋に遇ふ。1組は生後僅かに3ヶ月のいたいけな乳兒をつれて居る。何れも顔見知りて前途に不安を持つ気持ちは何十年の舊知の如く我々を親ませてしまつた。然し此の親しい團欒はやがて現實の問題にぶつつかつて我々の不安をかき立てた。此のいたいけな乳兒の爲のミルクを伯林に忘れて來た事を母親が発見したのである。伯林に電報すべきか或はハンブルグ到着後購入すべきか。或は伯林に引返してミルクを取つて來るべきか、我々は判断に迷はざるを得なかつた



第1圖 ベルゲン港 (巻首)

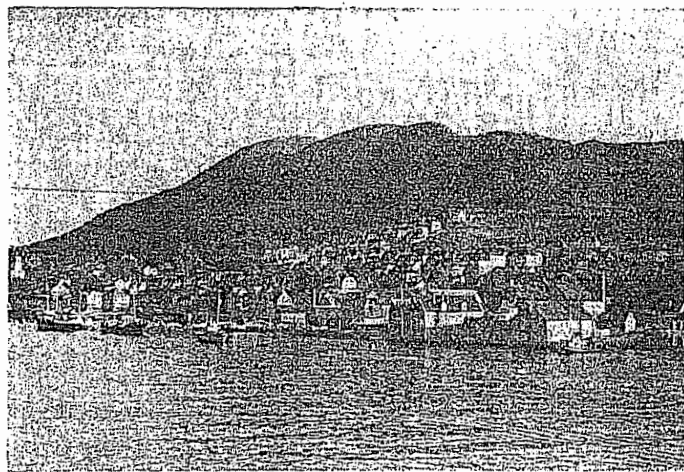
のである。2組の夫婦は特に心を悩まして色々と相談した結果遂に2時過ぎルドウ・ツヒスルス驛から彼等は引返して行つたのである。私達は彼等が無事にミルクを持つて再び漢堡に到着する様に祈つた。

實は我々の次の列車は既に大變な混雑であつて座席券のなかつた或る者は列車に乗れないで残されてしまつたのであつた。我々は云はば第六感で靖國丸の出帆に間に會ふかどうかと心配になつたのである。

ルドウ・ツヒスルス驛からは愈々戦時色が濃くなつて線路の護衛に立つ突撃隊員の姿が沿道に見えるかと思ふと、若い兵士を満載した貨物列車に行きあつたりした。彼等は林檎の様に色艶のよい頬に微笑を浮べて貨車の戸口から我々の列車に手を振つて居る。何かのんびりした風景である。

3時20分我々の列車は恙なく漢堡主驛に到着



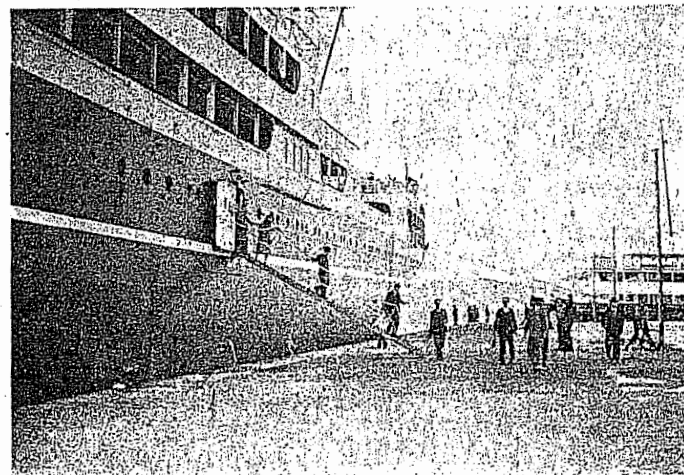


第2回 ベルゲン港 (著者)

した。荷物を赤帽に托してタクシーを拾ひ直ちに埠頭 81 番に急がせる。タクシーは例によつて便々たるビール腹を抱へた老運轉手に依つてガタガタと漢堡のうら淋しい郊外の道をエルベ河畔に向つて行く。

沿道はどこも彼處も一面に高射砲の陣地で之が全て擬装されて戦備既に終つたと云ふ形である。

30 分の後やがてエルベの河面が夕陽に光つて見えて來た。81 番埠頭には我々を待つ靖國丸が黒く塗つた見覚えのある姿を横付けて居た。久し振りに見る故國の船、此處には故國の生活があり



第3回 ベルゲン埠頭の靖國丸 (著者)

故國の感情があるのだ。そして此の船はあらゆる危険を冒して我々を祖國に運んで呉れるのだと思ふと私は不覺にも眼頭が熱くなる思ひがしたのである。

舷梯を登れば祖國の人々は我々をやさしくむかへて呉れた。彼等の顔と動作は彼等が祖國から直接獨逸へ運ばれたのだと云ふ印象を我々に與へた。事實外國で見る日本人は何れもどこか外國的の臭ひがする。顔も外國化された分子がふくまれて居るのであるが、此の船に見る同朋は全てが日本的であつた。私は一度に日本に歸つた様な思ひで大きく船に特有な臭ひを吸込んで見た。

私は直ちに日本人會から送つて貰つた荷物を受取り、部屋の割當てを事務室に聞き次いで船艙に降りて伯林から送つた荷物をたしかめた。既に百人に近い同朋が乗船して居た。大部分は伯林駐在の人々の家族である。そして婦人子供第一主義で部屋が割當てられて居るから我々男子は二等の方にまはされて居る。定められた部屋に降りると此處は水面から2米も離れて居ない所である。船窓の下に水雷でも流れて來たら忽ち吹飛ばされさうに水は近く見える。

出帆の時刻を聞くと今晚午後9時であるとの事である。明日早朝から明日午前3時となり、午前零時と早まり遂に今晚9時と變更されたのである。事態は急速に切迫しつゝある事がひしひしと感ぜられる。

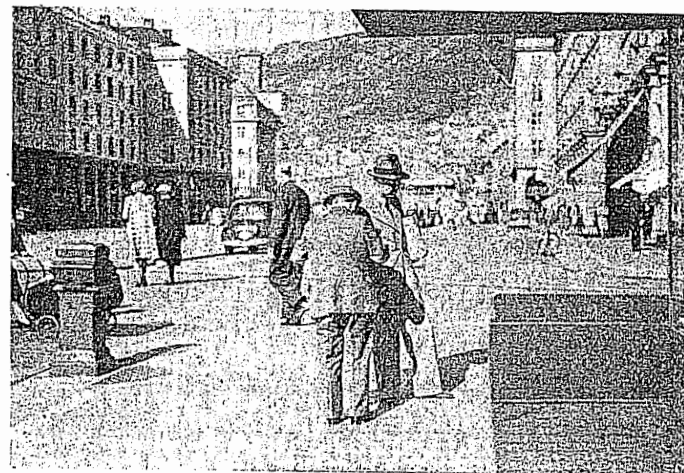
やがて獨逸の税關が船に乗込んで來て、國外持出しの馬克紙幣の検査が始まる。大抵の人々は100馬克以上の紙幣を持つて居るので之を申告

して封筒に収めて正金銀行員に寄託する事となつて居る。

やがて漢堡の港に夕闇が迫つて、久し振りに食事の合圖が聞える。懐しい日本の食事は前途45日の航海に備へて、まづしい一皿料理であつた。そして同朋のみの水入らずの食卓には悲喜交々の感情が流れてそこに何か一抹の不安な空氣を醸し出した。いとしい夫をやがて戦禍に捲込まれる獨逸に残す人々は箸取る手も進まず不安な瞳をふせて居るし、單身戦塵を逃れる我々さへも靖國丸が宣戰布告にならない前に、無事に封鎖網の豫定線を突破する事を祈つて居たのである。

食事を終つて私はデッキに出て見た。漢堡の町には既に灯が入つて、遙かにエルベの河面に華かな灯影が揺れて居る。既に靖國丸は出帆の準備に忙しい。淋しい埠頭には僅かの電燈が河風に揺れて居る。大部分の引揚同朋は集結を終つて人々は食後をデッキに出て獨逸での最後の夜を惜しむが如く語合つて居る。埠頭が一時静寂に歸つて幾人かの見送りの人々が電燈の影に寒い影を落して居る時、突如まばゆひ前照燈の光りが埠頭倉庫横からあらはれた。2臺の大型バスに同朋と其の荷物が満載されて居る。一目でM會社の人々と判る。之等の人々は戦争無しと判断して一時は引揚げを見合したのであるが、情勢刻々に切迫した爲にバスを借切つて國營自動車道路を急いで來た人々である。一しきり乗船のざはめきが起つた。知つた顔も見える。

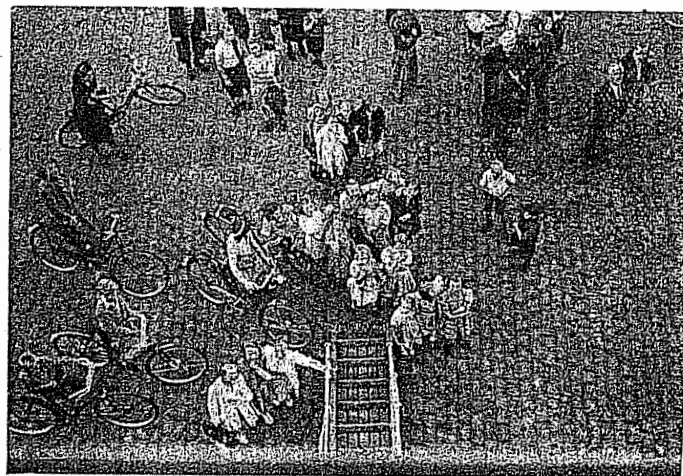
我々と伯林から同車して引返したS夫妻と其の愛兒は未だ顔を見せな



第4回 ベルゲンの繁華街 (著者)

い。

9時の出帆は刻々と迫つて、遂に見送り人の退船を告げるドラがあはたたく船内をゆすつて來る。私は親友Y君と2人最も高いサン・デッキに上つて出帆の情景を眺めて居た。我々の下の二つの甲板は引揚げる婦人と子供であふれて居る。埠頭から見送る夫は愛兒の名を呼んで手を振つて居る。舷梯は上げられた。靖國丸は甲高い汽笛を吹鳴らして一しきり起る惜別の呼聲と共に除々に埠頭を離れた。埠頭から頑張れと呼ぶ者が居るかと思ふと、聲を限りに父の名を呼ぶ聲も聞える。



第5回 靖國丸見物のベルゲン市民 (著者)

かくて靖國丸が約1米埠頭から離れた時、再び突如前照燈の光芒が埠頭を明るくして1臺のタクシーがあはたたくすべり込んで来た。船上の人も埠頭の人も一齊に此の間一髪の瞬間に到着した人に歡呼の聲をあげたのである。埠頭の人々は忽ち自動車をかこみ船上では號笛がなつて曳船が停止を命ぜられた。我々にはすぐに途中から引返したS君である事が判つた。舷梯は再び下されて埠頭の人々は舷梯の上に一列に並んで荷物は手から手へと渡されて忽ち船に運込まれ、彼の愛兒も人々の手から手へ移つて行つた。上から見て居た我々は同朋愛の美しさに涙が出たのである。S君は夫人を船に上げると舷梯の上に立つて、「どうもすみませんでした」と一同に感謝して埠頭に戻り、やがてエル・ゼックスの箱を取出して安心した様に一服した。燐寸の火に彼の紅潮した顔が照出された。

9時10分靖國丸は再び曳船に曳かれて埠頭を離れた。エルベの河水を分けて闇の中で旋回してやがて空を染めて居るザンクト・パウリの燈の照返しを右に見て速度を増してエルベを下つた。我々は數人の知友と喫煙室の後部のテラスに席を取つて居た。私は餘りにもあはたしかつた今日の出發を思返して、夜風の中にきらめく漢堡の灯影を眺めて居たのである。陰曆12日の月は空に掛つて銀波をゆるがして居る。Y君との話はつきない。彼の乗つた列車は我々の次の列車であつたが既にダイヤは亂れて座席券がない多數の人が後の列車に残されたと云ふ事である。我々の出帆は實に時機を誤まらなかつた様な気がするのである。エルベの流れを下る事約3時間、午前零時クックスハーフェンの漁港の光りを左舷に見て愈々北海に出る。始めての夜を輕いうねりを感じつゝ眠りに入つたのであつた。

翌朝眼をさまして見ると船は既に昨夜から非常警

戒に入つて居るのを知る。機械水雷の見張りは船首とブリッジの両端に配置されて居る。航路は陸と大部離れて居るらしく終日島影を見ないで北海の蒼茫たる海上を走つたのである。夜は全ての燈火を消してかくれるが如く闇を縫つて一路北へ北へと急ぐのであつた。

斯くて漢堡出帆後1日半の後、28日の早朝我々は一先づ危険區域を通過してベルゲンのフィヨルドの中に入つて居た。嘗つてスカンデナヴィヤの族に飛行機から見た様な岩山が右舷近く迫つて人無きフィヨルドは益々狭まつて行く。温度は急に下り、水は寒い色を湛えて再び北國に來た旅愁が湧くのであつた。やがて遠く近く淡霧の中に小島があらはれ、緑や赤に塗つた家が岩山の上に見える。

フィヨルドの中を2時間半の旅を終つて待望のベルゲンに到着する。船首からは測深錘が入れられて船は徐航しつゝベルゲンの埠頭に着いたのである。

ベルゲンの港は左右に標高350米の山をめぐらした良港である。嘗つて5月末に私はスカンデナヴィヤの旅を企て、フラス迄來たのであるが、遂にオスロー・ベルゲン鐵道の終驛たるベルゲンを見る機会を失つて残念に思つて居たのである。所がはからずも戰禍を避けてベルゲンを見る事が出來たのは或意味で幸運と云つてもよいのである。

我々は晝食をすませて簡単な旅券の検査を受けた後、上陸した。埠頭から歩いて急坂を上り更に下つた所がベルゲンのセンターである。此處にはズンド百貨店がある。同朋は期せずして此處に集り之からの長い航海に備へてタオル、石鹸、齒磨等の日用品を買つた。そして4階の食堂に集つたのである。此處では一先づ危険を通過した安心で人々はくつろいで休息の一時を過したのである。

ベルゲンの町は全てが英國の勢力範圍である事を示して居た。買物は磅貨で用が足り、カフェー

のボーイにも百貨店の賣子にも英語を話せる者が居た。そして物資は豊かで人々は歐洲の風雲をよそに楽しい生活を送つて居た。

然し新聞は歐洲の風雲益々急を告げた事を知らせ、又靖國丸の入港を大きく取扱つて居る。避難民180人を乗せて居る事や、又靖國丸の噸數迄書いて居ると云ふ仕末である。

ベルゲンの漁港に靖國丸程の大汽船が入る事は如何にも珍しい事である。その爲か午後になると靖國丸の繫留された岸壁には多數の市民が見物に來る様になつた。彼等は靖國丸の雄姿を岸壁から見上げて去りもやらない。そして我々船客の出入を物珍しげに見物して居る。我々は大いに心強くなつて町を闊歩した。

ベルゲンの港には英國の避難船1隻とノールウ

エー船3隻が入つて居るのみで他は漁船、帆船の類である。

夕食後は皆喫煙室に入つてラジオに聽入る。ダイヤルを廻して遂に英國と獨逸の放送をキャッチする。ヒットラーとヘンダーソンとが會談して時局收拾を行つたのであるが、ヒットラーは波蘭のコリドアと上部シレジアを要求したのでヘンダーソンは再び本國政府と會議する爲英國に歸つたと云ふ放送で、昨年のも問題當時を思はせるものがある。

靖國丸はストックホルムの日本公使館から命令のあり次第直ちに再出帆する事となつて、船客は午後9時以後上陸禁止となり、又晝間でも汽笛を吹鳴したら直ちに歸船すべしと云ふ事となる。

東大航空研究所囑託 横濱高等工業學校講師 小林喜通著 **飛行機の鋸打作業**

本書は現代飛行機工作法中最も重要な部門を占めてゐる鋸打作業について諸種の文献と著者自らの経験とによつて詳細に説明せるもので内外書籍中始めて出來たもので關係者必携の書である

**内 容**

- 第1章 總論
- 第2章 鋸材の性質
- 第3章 鋸打の一般的考察
  - 1. 鋸の種類
  - 2. 孔あけ及び軸長の決定
  - 3. 呼出し
  - 4. 成頭(鋸打)
  - 5. 當盤
  - 6. 管の鋸打
- 第4章 鋸接の諸型式とその鋸打法
  - 1. 丸頭鋸打
  - 2. 平頭鋸打
  - 3. 沈頭鋸打
  - 4. 管鋸打
- 第5章 機械及工具による鋸打
  - 1. 連打式空氣ハンマー
  - 2. 一撃式ハンマー
  - 3. 壓縮式鋸打器
  - 4. 連打式鋸打機
  - 5. 自働供給式ハンマー
  - 6. 自働鋸打機械
- 第6章 氣密鋸打
- 第7章 片側鋸打
  - 1. 特殊管鋸
  - 2. 爆發鋸
  - 3. ポツピング法其他
  - 4. ブレケ法
  - 5. ユンカーズの壺形鋸
  - 6. イセマン法其他
  - 7. 押し潰し法
  - 8. 其他
- 第8章 孔あけ作業
  - 1. 孔あけ工具
  - 2. 組立品に於ける孔あけの方法
- 第9章 假止金具
- 第10章 鋸接部の検査と修理
  - 1. 検査の必要と目的
  - 2. 検査の方法
  - 3. 不良鋸打とその対策
  - 4. 修理
- 第11章 鋸接部の強度

文 献 ・ 索 引

A5・全頁アート紙洋装9ホ横組・最新式寫真竝に圖面挿入・定價金¥3.80 送料〒¥.24

各書店にあり品切の時は當書房に御申込希ふ

東京市澁谷區 代々木上原町1334番

**航 研 書 房**

振替東京95985番 電話四谷6391番